

1、(韓非子より)

楚の国の人で盾と矛を売る者がいた。

この人はこれを誉めて

「私の盾は頑丈で、貫くことのできるものはない」と言った。

また、矛を誉めて「私の矛は鋭くて、どんなものでも突き通すことができる」と言った。

ある人が「あなたの矛でその盾を突き通したらどうなるのですか」といった。商人は答えることができなかつた。

2、(浮世物語による)

今となつては昔のことであるが、正月七日の朝、七草をたたく。

午前四時半から、拍子をとって、にぎやかにうちたたく。

その後は、七草がゆにして食べるが、あまり好きなものではないと思ひながら、浮世房は、このように(歌を)詠んで、

小姓衆に語つた。

七草を勢いよくたたきくけれども、餅をつく音に比べると、

(できあがつた七草がゆの味は)はるかに劣っているものだよ。

3、(十訓抄より)

ある人が次のように言っている。

「人間は、よい友達に出会うことを心の底から願わなければならない」

『麻(あき)に交じつて生(は)えている蓬(よもぎ)は、まっすぐ育つように矯正しなくても、自然にまっすぐに育つ』
という比喩(ひゆ)がある。

蓬は枝振(えだぶり)がまっすぐでない草であるけれども、麻に交じつて育てば、曲がつて育つスペースが無いので、知らず知らず、正しくきちんと伸び育っていくのである。

心が曲がつた人でも、心が正しい人の中に交われれば、やはりあれこれを氣遣つているうちに知らず知らずに心正しい人になるのである。

3、(論語より)

孔子がおっしゃいました、

良い友人には三種類ある。

正直な友、誠実な友、博識な友は良い友人だ。

4、(十訓抄より)

魯の国の仲尼(孔子)が、弟子たちを連れて道を(歩いて)いらつしやつたところ、ある所で、垣根から馬が頭を突き出したのを見て、「牛(だね)。」とおつしやつた。

(弟子たちは)はじめはこの言葉を理解できず、

めいめいが考えをめぐらしていたが、顔回を最初に、

思慮深い(頭のいい)順に(孔子の言葉の意味が)わかつた。

暦の十二支の「午」という字の、頭が突き出しているのは、

「牛」という字)である。

6、(宇治拾遺物語による)

これも今は昔、丹後守保昌が任国へ下る際、与佐の山で、一騎の、白髪の武士に行き会つた。

道の傍ら、木の下に、馬にまたがったまま佇立しているの、

国司の郎党たちが、「あの年寄はなぜ馬から下りぬのだ。

怪しからぬ奴。咎め立てて、引きずり下ろしてやる」

と言うが、国司の保昌は、「一騎当千の騎馬武者が立つようではないか。ただの人ではない、とがめるでないぞ」

と制して行き過ぎた。と、三町ほど行つたところで、

大矢左衛門尉致経(むねつね)が、大勢の兵士を引き連れて

やつて来るのと出会つた。

国司たる保昌が会釈すると、致経が言うには、

「この辺に年寄が一人でおられませんでしたか。

この致経の父、平五大夫にござります。頑固な田舎者なれば、

作法も知らず、無礼な真似を致しかねませぬ」と告げた。

そうして、致経が行き過ぎた後で、保昌は、

「やはり、彼は然るべき御人であつた」と言つたという。

7、(土佐日記より)

「今日は、波が立つなよ」と、人々が終日祈つたおかげで、

風も波もない。

ちようどその時、かもめが群れ集まつて遊んでいる所があつた。

京が近づく喜びのあまり、ある子どもが詠んだ歌、

祈りながらやつて来て、その風が風(な)いだと思ふのに、

どうして白いかもめまで波に見えてしまうのだろう。

5、(本居宣長、玉勝間による)

私の指導のもとに学問をしようとする人たちも、私の死後に、

また良い学説が思いつくようなことがあつたときには、

決して私の学説にこだわつてはいけない。

そのときは、私の学説の間違つている理由を言つて、

自分の良い考えを世間に広めなさい。

すべて、私が人を教えるのは、古い時代の道理を明らかにする

のが目的であるので、

いずれにしても、その道理を明らかにすることが、

私の教えを役立てることになるのである。

古い時代の道理を明らかにすることを思わなくて、

むやみに私を尊敬するのは、

かえつて私の本心ではないのであるのだよ。

8、(淮南子より)

魏の国の田子方という者が、年老いた一頭の馬が道にいるのを見て、心を痛めてため息をついた。

そしてその馬の御者に尋ねて言うには、

「これはどんな馬なのか」と。その御者が言うには、

「この馬は元々公家の家の家畜であり、年老いて用をなさなくなり、家から出して、この馬を売ったのです。」と。

田子方が言うには、

「若いときにその力をさんざん利用して、老いたときには、そのものを捨て去ることは、徳があるものは決しておこなわないことである」と。

田子方は、束はくでこの馬を買い取った。

年老いた人たちは、この話を聞いて、このひとこそ心を寄せられる人だと思った。

9、(十訓抄による)

鳥や虫などが恩を理解している例は多いものだ。

漢の武帝が昆明池にお出かけになったときに、

一匹の鯉が釣り針をくわえて死にそうにしていた。

武帝がこれを見て臣下に命じて(釣り針を外して池に)お放しになった。

その夜のこと武帝の夢の中に鯉が現れて感謝をした。

次の日池にお出かけになったときに、

昨日の鯉が明月のような光を発する宝石を啜えてきて、

池の岸に置いて去って行った。

その後その池で魚を釣ることを

(武帝が)禁じなされた(ということだ)。

10、(雨森芳洲、たはれ草による)

私が若く武蔵にいたとき、そのころまでは、朝鮮人参を使用する医者は、たいへんにめずらしい。

もしも、朝鮮人参を使用する医者がいれば、下手だといった。

「世間の人々は、朝鮮人参の効き目がわからない。」といて、杉なんとかという医者は、いつも悩みとして語った。

その後、李士材や蕭万興という人の書いた薬の使用方法を記した書物が世間に広まり、近頃になっては、軽い病気にも朝鮮人参を使わない医者は少ない。

もしも朝鮮人参を使用しない医者がいれば、下手だといった。そのようなころ、また、武蔵に行つて、杉なんとかという人に会ったときに、

「世間の人々は、朝鮮人参が害のあることを知らない。」と語つて、そのことをひどく悩んだ。

「とほめた。」

11は、テキストに訳が載っております。